この本はナルホドくんとみっちゃんがラブラブカップルにしか見えないという重病患者用のものです。そういう表現もあるので、苦手な方、精神年齢が１５歳未満の方は閲覧しないで逃げ帰ってくださいまし。

友情と愛情の境界線

微妙な二人。ちょっとキワドイ会話が（汗）。Ｉｍｏｄｅサイトでどこまで書いていいんだろう。

「ぼく、実は少し嬉しかったのかもしれない」

… … あれから数日後、家を訪ねてきた成歩堂が開口一番そんなことを言った。

「何の話だ？」

御剣は様子には出さずとも友人が訪ねてきてくれたことが嬉しくて、いそいそとコーヒーを淹れる。味が判るとも思えないがと皮肉なことを考えつつも、当然のように一番いい豆で。

だのに、成歩堂は嬉しかったのかも、の次にとんでもない言葉を続けた。

「御剣が……捕まった時」

がちゃんとコーヒーカップを割ってしまい、それに慌てることもなく今言われた言葉に呆然とする。

そんな御剣に慌てたのは成歩堂だ。

「あぁ、平気か？ 手とか、切ってない？」

指先に走る、一本の赤い筋。捕まってしまったとき、成歩堂は唯一縋れる蜘蛛の糸の存在に見えた。この赤い筋のように。

… … なのに。

「嬉しかっただと？」

「そんなことより、指切ってるじゃないか」

「そんなこと、だと？」

震える指先を、成歩堂は舌で絡めとった。

「なっ……」

敏感な指先を柔い粘膜の感触で刺激されて、背筋が粟立つ。

「よさないか、成歩堂！ 人の血を、そう簡単に舐めるものじゃない」

「……御剣がここにいるって、証だろ」

「何を言って……」

「御剣がぼくだけには弁護を頼みたくないと言ったときは、目の前が真っ暗になった。今度こそはぼくが、助けてあげられると思ったから」

舌が、指の付け根を這う。手を引こうとしても、成歩堂は思いがけないほど強い力を込めていて、引くことができない。

「そんなところ、怪我してないぞ……」

どう考えても愛撫のようなそれにも、そんな感想しか出ない御剣は、やはり天然なのだろう。

「スキだよ。御剣」

遠まわしに言っても無駄だと思った成歩堂は、ストレートにそう言った。

御剣はそんな台詞を吐く成歩堂にやや顔を赤らめて、ぱちくりと目を瞬かせて自分の指先を見た。

「指、舐めるのがか？」

「あのなー……。何でそうなるんだよ。お前が、に決まってるだろ」

「私が……？」

面と向かって言われると照れてしまい、御剣は赤くなって俯く。

成歩堂は自分のためにここまでしてくれた。そして、スキだと言ってくれた。

やはり、答えねばならないだろう、彼の気持ちに。

「わ、私も……君が好きだ、成歩堂」

言葉を搾り出すように、そう言った。

「御、剣……？」

震える成歩堂の声が聞こえて、これ以上言うのをやめてしまおうかとも思う。けれど、御剣は尚も続ける。

「一番大切な、友人だ」

勇気を振り絞って言ったのに、成歩堂はがっくりと肩を落としている。どうしたことかと訝しげな顔で彼を見た。

「成歩堂……？」

「……ぼくが言ってるのは、そういうことじゃなくって……」

何をされているのか、と思ったときは口唇を塞がれていた。

あまりの早業に呆気にとられていると、シャツの下から肌を探られる。

驚いて驚いて声も出ない御剣に、成歩堂が一人で喋りだす。

「ずっと、好きだったんだ」

だからってキッチンでいきなりこれか？ と言いたいが言えない。

「もう、止めれないから……。ずっと我慢してて」

何を。と突っ込みたいが声が出ない。

「だって、可愛すぎるんだよ、お前……」

どこが！ と言ってやりたいがやっぱり声は出ない。

御剣は脱力しかけている身体で必死に彼を押し返すことで意思を伝えた。

「……御剣」

「待て」

やっと声が出た。少し掠れているそれに、成歩堂が顔を赤らめたのが判る。

「何で、好き……でキスをするんだ？」

「友情じゃないからだよ」

「友情じゃないだと！？」

「いや、だから……愛情だったりするんだけど……」

「愛情？ 男同士で愛を語るのは変だぞ成歩堂」

「あの、だからね……変なのはぼくだって自覚してるってば」

「じゃあ何故だ！！」

「……お前見てると、したくなるんだ」

「何を」

「何をって……。簡単に言葉に出しにくいんだけど……」

口ごもる成歩堂を、御剣が追い詰める。

「私を見て、何がしたくなるというんだ」

言葉を発しているのが天然な彼でなければ、誘いの台詞としかとれない。

どうやら成歩堂は照れているらしかった。何度か何かを言いかけては止まるを繰り返し、やっと小さな声でぼそりと呟いた。

「……ス……」

「ス？ 何だって？」

「……だから、……だって」

「なんだと！？」

言葉自体は理解していても、今この時に出てくる言葉としては理解の範疇を超えている。

言われた言葉に思わず身構えると追いかけるようにキスをしてきて……先ほどと違って性的な意味合いを持つようになってし
まったそれに、ピシリと固まった。

固まっているのをいいことに、成歩堂が身体に触れてくる。

「な。してもいい？ もう限界。ぼく、お前が好きで好きで堪らないんだ。ずっと会って顔を見たいと思ってた。話がしたいと思ってた。こうして匂いが判るくらい傍によりたいって……」

「待て。待ってくれ、成歩堂」

背をひやりとした汗がつたう。いつの間にか天井を仰いでいた。つまり、押し倒されていると。

嫌じゃなく、むしろドキドキした。けれど、ただ怖かった。

「御剣、震えてるね」

「言うな……」

「でも、本気で抵抗してない」

「……」

「御剣もぼくが好き……だろ？」

「……………………判らない」

「今はそれでいいよ」

口腔内を舌で蹂躙される感覚に、思わず息が漏れる。苦しくて、何かに縋りたくて成歩堂の背に手を回すと、酷く嬉しそうな顔をした。

「……なんだ？」

成歩堂が、額をこつんと押し当ててくる。男同士でこれをやっても寒いだけだと御剣は思うのだが、彼は全然気にならないらし
い。

「なんだって……。好きな相手が手を背に回してくれたら、そりゃあこんな嬉しいことはないよ」

「む。そうなのか？」

「うん。好きだよ、御剣……」

瞼に優しいキスが落ちる。成歩堂は御剣をぎゅーっと抱きしめたまま、それ以上の行動を起こそうとはしなかった。

成歩堂の体温が心地よくて、背に回した手に力を込めると、下肢の方に妙な感触が起きる。

「……成歩堂？」

「我慢してるんだから、そう可愛く刺激されると……」

「じゃっ、じゃあこれは……」

「み、御剣を愛しいって思う証かな」

かなり苦しい言い訳に、御剣は慄いて成歩堂の下から抜け出そうと試みた。けれど、離してくれる様子はない。

「どんなに辛くても今日のところは我慢するから、もう暫くこうしててくれよ」

「ぜ、ゼッタイだな」

「ゼッタイだ」

それからワンテンポずれて、御剣が目を見開いた。

「今日のところは！？」

「僕、お前のことが好きなんだよ？ ここまでさせてくれる相手に、押さなきゃ嘘だろ。だって御剣は、僕のこと、もう嫌いになんてなれないよな」

成歩堂の言葉に、御剣は眉間に皺を寄せて考え込んで、ぼそりと呟く。

「嫌いになんて、なれるわけがないだろう」

嬉しそうではあるがちょっと苦しそうな顔をする成歩堂と、足の傍で体積を増すそれに、嫌いだと言っておけば良かっただろうかと思う。

… … 御剣はまず、自分の破壊力をもっと理解するべきである。

成歩堂が今日のところも我慢できなくなるのは時間の問題だった。

友情と愛情の境界線２

あれから、御剣に避けられるようになってしまった……。

電話も取り次いでもらえなかった時を思い出して、悲しくなる。

今日こそは会ってもらおうと、彼の家の前で待ち伏せをすることにした。

携帯にかけても、ずっと話中のままだ。着信拒否をされているのかもしれないと思うと、気が気ではない。

会って話を。そして、顔を見たい。最近は法廷でも会っていない。

… … どれくらいが経ったろう。

いつまで経っても御剣が現れる様子はない。

寒空の中、何時間か御剣を待ち……日が変わる時刻になって、ようやく成歩堂は諦めることにした。

「やっぱり、ちょっと早かったかな。あいつには」

言わずにもう少し待てば良かった。友人を失いたくないという気持ちからでも、受けて入れてくれるようになるまで。

… … ずるい考えではあるが、こういう状況の今だからこそ、尚更そう思う。

「御剣……」

愛しい人の名前を呟いて、帰路につく。

ぽてぽてと歩いているだけであの皮肉な笑みが頭の中を浮かんでくる。

ああいう皮肉っぽい顔も、クールな顔も、今になって思えば可愛いとしか思えない。

商店街を抜けて、自分のマンションの扉の前で、成歩堂はピシリと固まった。

… … 夢を見ているのではないかと。

「やっぱり……天然なんだからな。普通じゃない」

喉の奥で、クッと笑う。

まさか、漫画の中ではあるまいし待ちくたびれてドアの外で寝ているとは。

「待ってて、くれたんだ」

ドアの前では、御剣が寝息を立てていた。

こんなところを住人に見られたら何を言われるか判らない。

矢張とは違い見た目だけは真面目そうな御剣なので、通報などはされないだろうが……。

成歩堂は愛しさを抑えきれずに、あたりを見回して誰もいないことを確認してからその場でキスをした。

「ん……」

眠そうな目が、何度か瞬かれる。

「起きたか？」

「成歩堂ぅ……？」

少し周っていない舌で自分の名前を呼ぶ御剣に、何かが背筋を這い上がる。

可愛い。容赦なく。

「と、とにかく上がっていけよ。僕を待っててくれたんだろ」

思わず目を逸らしてしまった。動揺を隠せない。

「……君の家の前で、他の人物を待ってどうする」

御剣はといえば相変らずだ。こんなところも可愛いけれど。

ともかく部屋に上がらせ、冷え切った身体を温まらせるべくお茶を入れる。

自分の家のソファーに御剣が座っていると思うだけでドキドキして、何度もお茶を零しそうになった。

「家の前で眠るなんて、無用心だぞ」

まずは、叱る。御剣は自分の容姿を自覚していない。今の世の中、御剣くらい綺麗なら男でも襲われても、ちっともおかしくはないのだ。

けれど御剣は、湯飲みを握り締めながらぼそりと呟く。

「君が悪い」

「僕が？ そりゃ、今日は帰ってくるのが遅くなったけど……」

御剣がきゅっと眉間に皺を寄せた。泣きそうな顔にそそられる。
… … いや、そんな場合ではない。

「どうしたんだ？」

「君は……あんなことをしておいて、一度も私に連絡を取ろうとしない」

「はぁ！？」

それは御剣の方じゃないのかと言いたげな声を出した成歩堂だったが、これがまずかった。

かああと顔に朱を上らせショックを受けたような顔で、御剣が立ち上がる。

「帰る」

「うわっ、ちょっと、ちょっと待って！ 違うんだ、僕、何度も連絡したんだよ！ でも電話、繋がらなくて……」

「そんなの、言い訳だろう」

「……そんな拗ねた言い方すると、襲うぞ」

拗ねた様子が可愛くてそう言ったのだが、彼はびくりと身体を震わせて今度は不安げな顔になる。

「怒った……のか？」

… … 成歩堂は、今度こそ耐えられなくなって御剣を抱きしめた。

「な、成歩堂！？」

「今日だってお前の家の前でずっと待ってたよ。嫌われたかもって怖くて。僕の方がずっとお前のことを想ってるって、そう思ってたけど……」

「そんなことはない」

「……キスすると怒るくせに」

「むぅ……」

機嫌を宥めるどころか悪くされるかもと思いつつ、宥めるようなキスをした。

ふんわりと羽が落ちるような優しいキス。

御剣は、怒らなかった。

「私の家の前で、こんな時間まで待っていたのか？」

「それはお前も一緒だろ。それにまさか御剣が僕の家に来てくれるとは思わないから。しかも可愛い寝顔……いててっ、足踏むな、足！」

できれば寝顔はベッドの中で見たいなぁ……なんて言ったら怒られるだろうなぁ……。

そんなことを考えつつ、成歩堂はもう一度柔らかいキスを落とす。

自覚した恋心は急速に成長していて、そろそろ抑えるのも限界になってきそうだ。

親友……という想いが長かっただけに結構照れるのだが、御剣は尚更そうなのだろう。

「お前が……好きなんだ」

何とか雰囲気を盛り上げようと、熱っぽくささやく。

その意図を御剣が汲んでくれるわけがないと判ってはいても。

「何度も言わなくても、それくらいは記憶している」

「じゃ、夜中にそんな男の家に上がるのがどんな意味を持つのかわかる？」

「何がだ？」

全然判ってない……。

法廷ではあんなに理知的なくせに、どうしてこうした人の心理が判らないのか……。

堪え切れずに、今度は深いキスを誘った。さっきまでの穏やかなキスを受け入れていた御剣は、嫌がって身をよじる。

「御剣？」

「……ッ、そのキスは嫌だ」

「どうして」

「それくらい、判れ」

御剣の考えていることはまったく判らない。それを判れと言われて、成歩堂は困ってしまった。

けれど言葉通りにとっていいのなら……。

「……感じるから？」

口に出しておいて自分でもちょっと恥ずかしくなったが、御剣は嘘のように真っ赤に染まった。

「ち、違う。キ、キモチが悪いからだ」

明らかに嘘である。判れ、といっていた事柄とは違うだろう。自分で振っておいて照れるとは、流石御剣だ。

少しずつ後ろに縋る彼の身体を、強く抱きしめた。

「苦しいぞ、成歩堂……」

「御剣が逃げるから」

軽い攻防の後、成歩堂は御剣をソファーに押し倒すことに成功した。

「成歩堂！」

「何もしないから。抱きしめるだけで」

「この前の時はそう言って、触っただろう」

「いいじゃないか。触るくらい」

「良くない」

触ったといっても、際どい場所には触れていないのに。

「別に何かしてもいいんだけど」

「嫌だ……」

「うん。御剣が嫌がるなら、僕は何もしないから」

いつまで保つか謎だけれど。

心の中で言った声が当然聞こえない御剣は多少安心した顔をした。

「でも、御剣……。何で僕に連絡くれなかったんだよ」

「携帯番号を聞いていない」

「あ……」

そういえばそうだった。御剣のを聞き出しておいて、自分のは言っていなかった。

こっちからかければ自然に判るだろうと……。

「でも、いつも電話中で……。繋がらない僕が心配するのは当たり前だけどさ、御剣は電話中にかかってきたかもとか思ったりしなかったのかい？」

「電話などそうそうしていない」

「……僕は数十回はかけたけど」

「そんなにかけたのか？」

「そんなにって……言うなよ」

自分でも少しストーカー入っている自覚のある成歩堂は、うーんと唸った。

何しろ法廷まで追いかけてきたくらいだ。もうこの際少しくらい行き過ぎてもハッキリ言って気にならない。のは流石に少し問題があるが。

「けど、いつも電話中だった。初めなんて君の声が聞きたくて十分おきくらいに頑張って電話してたのに」

「番号が違っていたのではないか？」

「何度も確認したって。ほら」

成歩堂はもらったメモを彼に手渡した。

「あ……」

「御剣？」

「すまない。番号を、間違えていた……」

そう言うと、照れたようなバツの悪いような表情を作って、俯く。

成歩堂は何だかおかしくなってしまって、盛大に笑った。

「な、何がおかしい」

「だって、番号間違って渡しておいて、僕から電話がかかってこなくて心配になってうちに来たんだろ？ あはは、お前らしくないというか、らしいというか……」

「す……すまなかった」

間違えたのは御剣だし、オマケにこんな夜中におしかけ、成歩堂は何度も電話をかけた挙句出ないので心配して家の前で待っていたという。流石の御剣も、笑われたとしてもお釣りがくるくらい罪悪感を感じているのだろう。

「悪かったと思ってるなら、誠意を見せて欲しいな」

「誠意……？」

成歩堂は、御剣の手をとった。何をされるのかと身構える御剣にくすりと笑って、彼の手を自分の携帯に導いた。

「今度は、ホントの番号入れて」

ダイヤルさせる。すらりとした指がゆっくりとボタンを押して、御剣の携帯が鳴る。

「これで、御剣も僕の番号がわかるだろ」

「そうだな……」

握った御剣の手が、熱かった。鼓動も少し、早い。

「御剣……。心臓の音、速いな」
「君こそ……」

「お前に触れていれば、速くもなる」

成歩堂はそっと、御剣の手を自分の心臓に当てる。

「ほら」

「本当だ」

言葉の裏を判っていなそうな御剣に、そっとキスをする。

「また速くなる。そろそろ限界かもしれない」

「そうか。……私もだ」

信じられない言葉を聞いたあと、御剣の身体が覆いかぶさってきた。

意外すぎる展開に狼狽して目を白黒させていると……。

「み、みつる……ぎ？」
「……………………」
軽い寝息が聞こえてくる。
「限界って……そっち……？」
思いもがけずベッドで御剣の寝顔を見るハメになった成歩堂はその日、ソファーで寝た。同じベッドに寝るには流石に少し自信がなかったせいだ。
日 ただ、ベッドの貸し賃としてこれくらいはいいよな、と自分に言い聞かせ、首筋に所有印をつけておいた。当然わざわざ見える場所に。
明日、彼がどんな顔で怒るか見物であると――思っていたのだが、目が覚めてみると御剣の姿はもうそこにはなかった。
携帯を見ると、録音が一件。その番号にどきりとする。
「御剣だ……」
震える手でボタンを押すと、耳に心地の良いテノールが聞こえてくる。
「昨夜は……すまなかった」
それだけ。
「キスマークには気付かなかったのかなぁ……」
内心どんなことを言われるかと楽しみにしていた面もあったので少し拍子抜けして、成歩堂は歯を磨こうと鏡の前に立つ。そして……歯ブラシを手にとって、それを見事に取り落とした。
昨日、御剣につけたのと同じ場所にキスマーク……。
成歩堂は鏡に手をついて、盛大に笑った。
「仕返しかよ！ 君ってヤツは……。ふ、ふふ……」
小さい報復は成歩堂を微笑ましくさせるだけ。
御剣にとって嫌がらせでつけたそれは、成歩堂にとって嬉しいものでしかない。何しろ、あの御剣のキスマークだ。
「まるで、大きな子供だよな、あいつ……」
それから成歩堂は、御剣からの留守録を何度も何度も繰り返し聞いた。
手に入った、御剣の声。これでいつでも彼の声を聞くことができる。
声で我慢しているけど、いつかは本物が欲しいよと言ったら、あいつは照れるだろうか。それとも、意味が判らずに眉間に皺を寄せるだろうか。
どっちにしても、まあ……可愛いから、いいか。
そして、もう一度携帯のボタンを押す。

『どうした成歩堂？』

「うん。ちょっとね……」

やっぱり録音よりも、今、の声が聞きたい。できることなら顔を見たい。

言葉には乗せずに、彼と他愛ない話をした。

友情と愛情の境界線２・終

友情と愛情の境界線３

友情から一二歩三歩と近付いて、四歩目駆け足五歩目で愛情。

そんな図式があればいいのにと思う。

友情と愛情の境界線。

一体この想いの、どこからが愛なんだろう。

どうすれば、愛情だと思ってくれるのだろう。

もう、こっちはとっくに愛なのに。

―― 友情と愛情の境界線――

暇さえあれば愛しい人に電話をして、気付けば電話代が月三万。

依頼の少ない身としては、厳しいところだ。

運で渡っていたような成歩堂に、依頼は少ない。

けれど放っておけば御剣は、絶対に電話をかけてきてくれたりはしないから、成歩堂は辛くても一日一回は彼に電話をした。

そのうち、飽きられるのではないかとも思ったが、御剣は意外と電話に付き合ってくれる。それどころか嬉しそうにしている気配さえあるとなれば、電話をするのを止められる筈はない。

好きだよ、愛してるよ、君が愛しくて堪らない。

その類の言葉を言ってしまえば、照れて電話を切られてしまうから、できるだけ長く声が聞けるような会話をする。そして、ふとあることに気がついた。
御剣が好む会話。
いっそのこと、そこから……彼に気付かせることはできないだろうか。
確か今は大きな裁判も入っていなかった筈だと、成歩堂は早速電話で可否を確かめてから御剣のマンションへ向かった。思えばこうして彼の家に来るのも久しぶりだ。
電話でもできる話だが、できれば会ってしたかった。あわよくば……という気持ちがないと言えば嘘になる。好きだから仕方ない――そんな言葉を免罪符に、成歩堂はインターホンを鳴らした。
ドアから出てきたのは……ほあほあの御剣だった。
つまり……風呂に入ったばかりだったと。着ているのも寝間着ではないが部屋着のようなラフなものだ。家に来るといって、その前に風呂に入るなんて、まるで……。
「どうしたんだ、成歩堂。入らないのか？」
「あ、は、入る、入るよ」
なんて、考えているわけはないな、と自分をたしなめて大人しく靴を脱ぐ。
御剣の生活の中に加わるようで、家に上がるのは相変らず心が落ち着かない。
「どうしたんだ、急に来るなどと言うから、驚いたぞ」
「ごめんごめん。どうしても、お前と交わしたい議論があってさ」
「議論？」
「そう。実は友人から尋ねられてね。僕の身には余るから、一緒に考えてもらおうと思って」「ふむ」
いつかのように、御剣がコーヒーを淹れてくる。
熱いそれを一口啜りながら、成歩堂は話を切り出した。
「親友を好きになっちゃった友人がね、凄い悩んでいるんだ」
「恋愛相談なら、私に尋ねられてもわからないぞ」
「違うよ。議論って言ったろ。友情と愛情の境界線が、どこだと思うって話」
「どこって……。たいして変わらんだろう。相手を大切に思うというところは」
「でも、それじゃ駄目なんだ。例えば、お前、僕の事をどう思ってる？」
「大切な友人だ」
きっぱり友人と言い切ってくれた御剣に多少の落胆をしながらも、成歩堂は諦めずに話を続ける。

「じゃあ、僕が恋人になってくれと言ったらどうするんだ」
「それは……」
御剣の眉がよって、彼はゆっくりと首を振った。
「困る」
相変らず可愛いが、やっぱりがっくりくる。
「じゃあ友情と愛情は、違うってことになる」
「待て、成歩堂。しかしだな、私と君は友人で、男同士だぞ。男同士は恋人になれないし、結婚もできないんだ」「でも……僕は、お前と恋人同士になりたい。お前なら、友情と愛情の境界線は、どのあたりだと思う？」
「むぅ……」
今度は、真剣に考え始めたようだった。
多分今のやりとりで、存在を自分に当てはめたのだろう。
その時引き合いに出されるのは他でもない成歩堂だ。
「そう、だな……。顔を見るとドキドキしたり、相手に触れたいと……思うことだろうか」相手に触れたいと思うこと……。一応御剣も、成歩堂が自分を好きだということは理解しているのか、多少居心地が悪そうだった。
「覚えていると思うけど、僕は、お前に触れたいと思ってるよ？」
「……今は、君の友人の話だろう」
「それ、本気で考えてもらうための嘘。初めから僕とお前のことだって言うと、絶対に照れて答えを出してくれないと思って」
「成歩堂」
イキナリ強い声で呼ばれて、怒らせたかと緊張が走る。
けれど、彼ははあとため息をついて肩を落としただけだった。
こういう意外な姿を見せられて、どきどきするのもやはり想いが友情ではなく愛だからなのだろう。
「君は、卑怯だな」
その可愛らしい反論にもどきりとする。彼と話をするのは幸せだけれど、心臓に悪い部分があるのも確かだ。
「うん。僕は卑怯だよ」
成歩堂は肯定して、御剣の頬にそっと触れた。
思わず身を引こうとするのを許さず、無理矢理顔を覗き込む。
固まる御剣に言い聞かすように、囁いた。
「御剣が友情で僕を拒めないのを知っているから、多少強引にでもお前が友情でなく愛情だと認めてくれるのを待ってる」

「それじゃあまるで、認めてないだけで私が君に感じているのが愛情だとでも言いたげだな」
「違うのか？」
ここは強気に出るべきだ。
肌に触れるのを嫌としない御剣を信じて。
「よく考えてよ。お前、議論好きだろ」
「こんなのはキライだ」
「嘘だ。きちんと考えて。僕は前にも言ったけど……お前としたいよ。凄く。凄く好きだ。友情なんかじゃない」軽く、キスをする。
「僕にこうされるのは嫌？」
困ったような顔をする御剣に、ひょっとしたら嫌なのではないかとも思う。
でも、引いてる余裕なんてない。引いてしまえば、御剣は絶対線のこちら側に入ってこないだろうから。「嫌ではないから……困っている」
ドキリ、と胸の中で高い音が響いて、鼓動が早くなった。……御剣のも、同じように早くなっている。「この前もそうだけど、今日もドキドキしてるよ。期待してる？」
「何を……」
今度は、深いキス。唾液の交換をするような、深いキスを誘う。
かちりと歯が鳴るのも気にせずに貪ると、強い力で押しのけられた。「よせ……ッ。……ッ、成歩堂。どうして君は……」
「……御剣？」
上がった血が引いていくような気がする。
何を言われるのだろうと、呼吸を整えた。
「どうして、友情じゃいてくれないんだ」
… … やっぱり。御剣は、愛情を感じてはいてくれないのか。
押そうと思ったけれど、ここまでハッキリと否定されたのではどうにもならない。諦めるしかないのだろうか。絶対に諦められないと思う。
せめて御剣が……。
「結婚すれば諦めもつくかな……」
そう一人ごちると、御剣がびくりと身体を震わせた。

「そ、それは嫌だ」
「……え？」
成歩堂は、慌てて今の状況を組み立てる。話の流れ的に、今のは。
「別に、結婚したって友情は続くけど？」
勘違いしているのを幸いと、話をそのまま運んでいく。御剣はアッサリと勘違いしたまま、低く唸った。「……むう。だが……君が……」
「僕が？」
聞き返すと御剣の顔がかあっと朱に染まる。
「なんでもない」
「何でもないわけないだろ！！ 最後まで言え、この……！ 言わないと、この場で押し倒すぞ！」「な、何を馬鹿なことをッ！」
「僕は本気だ」
「……き、君が私以外の人間を好きになるのは嫌だと思っただけだッ！」
「え！？ ほんとに！？」
「だ、だから。私だって、びっくりしている」
らしい答えに、また心臓の音が高鳴っていく。多分、御剣の心臓も同じように早いのだと思った。「ホント、子供みたいな独占欲だよな。それでどうして僕を愛してるって、思わないんだ」「ゆ、友情だから……だろう」
「でも僕は、友情じゃあ嫌だよ？」
御剣の指先から腕までをそっとなぞって、そのまま彼の口唇に口唇を重ねた。
お互いに目を瞑らないキスはまるで何かの合図のようだった。
二度目は、目を瞑って深いキスをした。
「境界線、越えていい？」
「言ったら……押し倒さないって言ったのに」
拗ねたような声色が可愛くて、思わず含み笑いをすると怪訝な顔で見上げてくる。「いや、可愛いなと思って」
「……君の感性は相変らず良く判らないな」
「いいんだ。僕だけが判れば、それでいい」
結局、その場に御剣を押し倒した。

「な、成歩堂！！」
「僕は言わないと押し倒すと言っただけで、言えば押し倒さないと言った覚えはないよ」
「い、意義あり！ そんなの……」
「境界線なんて、一度越えれば二度目は案外あっさりしたものだよ」
「その一回も、越えたいとは一言も言ってないぞ！」
いつもより少ない枚数の服を脱がすのは、案外簡単だった。
友情ではない証拠に、触りたくて触りたくて仕方がない。
指で少しずつ上から下に感じる箇所を探っていき、少しでも反応を返す場所には開拓するように舌で繰り返し愛撫を加える。ズボンに手をかけると、流石に強い抵抗にあった。
「それ以上は本当に変態だぞ、成歩堂ぉ！」
「あのなぁ、変態はないだろ。好きな奴になら、普通触れたいって思うだろ？ 特に隠されたあたりは」
成歩堂はどんどん強気になっていく。
本当に嫌だったら、男に触られたって嫌悪感で感じたりはできない筈だ。
けれど……。
「別に、恥ずかしくなんてないよ。感じてたって」
「……君の言葉ほど恥ずかしいものはないッ！ 私は君に囁かれるたびに、死にたくなる……」
死にたくなる、にあたるものが恥ずかしくて、だと判っているから成歩堂はそれに指を伸ばした。
「あ……ッ！」
「恥ずかしい言葉って、もうこんなに感じてるくせに……とか？」
本当に恥ずかしいのか、御剣は今まで見たこともないくらいに真っ赤になって、震える睫に雫を乗せている。唇を噛んで何かに耐えるようなその表情が、たまらない。
その顔は、反則だろ……と心の中で呟いて、首筋に噛み付いた。
この前と、同じ場所へ。
御剣にもそれが判ったのか、手の中のものが体積を増す。
「好きだよ、御剣……」
「ッ、やァ……」
自分の声が聞こえるのに抵抗があるらしく、声を必死で抑えようと指を噛もうとする。それを押しとどめるために、口唇で塞いだ。

声が聞きたいのはやまやまだけど、傷つけたくない。
舌先で口腔内を嬲って、同じように指先を動かす。
大人しく口の中を蹂躙させていた御剣が、成歩堂の口唇をがりりと噛んだ。
「や、嫌だッ……！ 嫌だ、成歩堂！！」
「……御剣」
鋭い拒絶に、身体が冷えていく気がした。
「こんな……こんなのは、いや、だ……」
顔が涙でびっしょりと濡れている。泣かせたのは自分。守ってやると決めたのに、傷つけてる。
友人を失くしたくないという気持ちに付け込んで、抱こうとした。
「ごめん……」
宥めるように淡いキスを何度かすると、軽く震えただけで嫌だとは言わなかった。
だから期待してしまうのに。嫌ならば、何もかも拒絶してくれればいい。本当に友情だと思うなら、キスの段階で逃げてくれればいいのだ。
御剣はまだ嗚咽の止まらない状態で、胸が締め付けられる想いだった。
「ごめん、ホントごめん……」
謝罪とキスを繰り返して、ぎゅうっと抱きしめる。
御剣が身体の力を抜いたのが判った。
「……すまない」
「謝るのは、僕のほうだろ」
とりあえず御剣が怒ってないことに安心する。却って御剣の方が成歩堂が怒っていないかどうかを伺っている様子に、罪悪感が沸いた。
「僕が、悪かったから。もう、しないから……」
身体は辛かったけれど、じわりと上がってくる熱を押しとどめて、御剣の背を安心させるように、ぽんぽんと叩いた。「こういうのは……苦手なんだ」
「僕だって得意だってワケじゃないけど、御剣が好きだから……欲しいって思うだけで」「そうか。私はそうは思わないが……」
御剣は大人しく成歩堂に抱きしめられたまま、彼の腕を軽く掴んだ。
悲しいことを言われている筈なのに、響きが甘いせいかそうとは取れない。
一旦切って、御剣は思い切るように言葉を続けた。「多分、君のことが……その。好きなのだろうな……」

「それは、……やっぱり、友情とし……」

成歩堂の質問は、御剣の口唇に飲み込まれた。

初めての彼からのキスは、思った以上に甘く優しくて、湧き上がる凶暴な気持ちすら抑えられる気がした。

キスしたいと思うなら、それは。

「御剣……？」

「……」

「何もしないから……好きじゃなくて、愛してるって、言ってみて」

「そっ、そんな恥ずかしいこと、言えるわけがないだろう！」

… … 境界線まで、あと半歩。

友情と愛情の境界線３

境界線シリーズ３作までのあとがき
すいません、ただひたすらすいません。友情と愛情の境界線はここまでです。何故なら次からはもう愛情だからです。愛情の先まで書くので、一応境界線シリーズは続きます。次は閑話ってとこです。しかし多少エロですネ……最終話はシャレにならないのでこちらにはちょっと載せれないかもしれません。

境界線の途中で

境界線の向こうには一体何があるのか。

甘く、好きだ……と言ってくれる御剣。自分からキスをねだってくれる御剣……それから……。

成歩堂がそんなことを考えていると、頭の上に柔らかい物がぽこんとあたる感触があった。

「こんな所で何をにやけている」

前を見ると、席を立った御剣がいつの間にか戻ってきていた。

さっきまで読んでいた新聞紙を丸めて殴ったらしい。

ここは某ファミレス。今はちょうど法廷も重なっていないので、二人で仲良くお食事などをしていたワケだ。

二人で仲良く……とは言っても、やはり誘ったのは成歩堂の方だったが。
パフェを食べている成歩堂は長スプーンを銜えながら、ちぇ、と舌打ちした。

多分君のことが好きだ……。
多分とはいえ、そんな殺し文句のようなことを言って自分から口付けてさえきたくせに、まだちょっとしたスキンシップにさえ照れる御剣。
当然ながら、ヤッテナイ。今更ナニをと聞くまでもないだろう。
「スプーンを銜えるのはよせ。みっともない。一体何を考えているんだ」
「お前のこと」
「っ……、それで……お前は、私のことを考えてあんな顔でにやけていたのか」
一体自分はどんな顔でにやけていたのだろうと思わず顔を撫でてから、成歩堂はニッと笑った。
「どんなことを考えてたか、知りたい？」
「知りたく、ない……」
「まあ、ここでは言わないよ。だって言ったら殴られそうだからな」
「そっ、そんな内容なのか……私が殴るような」
困惑したような表情が可愛い。思わずこの場で抱きしめたくなってしまって本当に困る。下手すると猥褻物陳列罪並び痴漢の容疑で逮捕されそうだ。
「しかし……君はよくそんなものが食べれるな」
御剣がナフキンで口唇を拭きながら言った。
そんなもの、というのは成歩堂が食べている甘いパフェのことだ。
「これ？ 意外と美味いんだぜ～」
「大の男がパフェなどと……」
「食べてみるか？ ほら」
成歩堂は生クリームのところを軽くすくって御剣に向けた。
ウッという表情のままで固まった御剣にはたと気付く。確かに大の男二人でこんなことをやっているのはおかしい。おかしいが……これってちょっと恋人同士みたい。しかも普通はやらないとは言っても御剣はその普通が判っていなくてためらってる感じ。
「どうしたんだよ。食べてみろって」
「その……最近は、これくらい普通なのか？」

「は？」
「だってだな、こういうことは恋人同士くらいしかやらないだろう。男同士でやっていたら変以外の何者でもない」「何言ってるんだよ。普通だって。友人同士でもやってるって」
女の子同士なら。
男同士じゃあまりやらない。しかもパフェで。
けれど成歩堂はこれが如何に自然かを御剣に口説き始めた。
もはや何が何でも、銜えて欲しくてたまらなかった。
… … いや、スプーンを……。
そんなことを真面目な顔で考えていると、まだ躊躇いのある御剣は辺りを少し見回して、パクンとスプーンを銜えた。その俯きがちな表情。長い睫が上からハッキリと見える。照れと躊躇いのある表情に、腰が疼いた。
（ヤバ……）
覚えのある感覚に、高ぶる鼓動を必死で抑える。
だが、嬉しい……という気持ちは止まらない。

御剣が、御剣が、僕の使ってたスプーンでパフェの生クリームをパクって……！

興奮冷めやらぬ感じである。
しかも……。
「甘いな……」
そう言って口唇の端に少しついた生クリームを指でちゅと拭う仕草が……。
「痛たたッ……！」
「ど、どうした、成歩堂！」
「い、いや、何でも……」
「何でもないという顔ではないぞ。幸いここは私の家から近いし……早く出て休んでいくか？」とっても嬉しい申し出に、成歩堂の顔が更に苦渋を増す。
「本当に真っ青だぞ、平気か……？ さすってやろうか？」うろたえてこれでもかという発言をした御剣に、成歩堂はテーブルにぱったりと突っ伏した。「何でもないという顔ではないぞ。幸いここは私の家から近いし……早く出て休んでいくか？」とっても嬉しい申し出に、成歩堂の顔が更に苦渋を増す。

「本当に真っ青だぞ、平気か……？ さすってやろうか？」うろたえてこれでもかという発言をした御剣に、成歩堂はテーブルにぱったりと突っ伏した。「い、行きたいのはやまやまなんだけど……」
「だけど？」
「た、立てない……」
「立てないくらい痛いのか！？」
成歩堂はもはや『別の場所なら立ってるけど』というギャグをかます余裕すらなかった。
というか、シャレになっていない。
「その、少ししたら……収まると思うから」
「本当に平気か……わ、私にできることがあるなら言ってくれ。何でもするから」「……………………………………何も言わずに、前に座っていてくれるかな……」少ししても収まらなくなりそうな身体を抑えるのに必死な成歩堂だった。
彼の頭の中では既に境界線を越えて『何でも』奉仕しまくる御剣検事の姿が。
「み、御剣……お願い、できるかな」
「何を……」
「嫌いだ、もう会いたくないこのストーカーめって言ってくれる？」
「な、何故だ」
「どうしても……」
御剣はちょっとためらった表情で……。
「嘘でも言えん。私は……君とこうして会っている時間がとても大切だから」
もはや確信犯なのか滅多に言わない台詞をバシバシ吐いてくれる。
（嬉しい、嬉しいんだけどッ！！ でも……！！）
「だから、死ぬな、成歩堂！！」
「はァ！？」
幸か不幸か驚いて一気に熱が冷めた。
あまりにも具合の悪そうな成歩堂に、よほど慌てていたのか御剣も同じように青くなっている。それにまた反応してしまいそうで、成歩堂は慌てて席を立った。
「と、とりあえず出よう」
「治ったのか？」

「ああ、収まった……」
「そうか、良かった……」
心の底からホッとしたような柔らかい笑みを見せる検事に、成歩堂はますます会計を急ぐことになる。

腹痛だと思っているからだろうけれど……幾らなんでもさすってやろうか発言は犯罪だ、御剣……。

暫くは夢に見そうだな、と考えて成歩堂はまたにやけた。
できれば先に行きたいけれど……境界線すれすれな、こんな関係も悪くはない。
「……また、何を笑ってるんだ」
「何でもない。じゃあ君の家に行こうか」
「腹痛が治ったのにか？」
「ああ、きっとまたすぐに痛くなるだろうし」
「そ、そうなのか？ そんなに腹の調子がおかしいのか？」
「ハハハ」
「何故笑う、成歩堂ッ！」
「……それは、部屋に行ってから教えるよ」
その答えを教えたら、境界線を越えられるだろうか。
なんだかんだ部屋に寄っていくことを良しとした御剣に、成歩堂は境界線の先を見た気がした。

境界線シリーズはここで終わりです♪
本当は境界線の先……があるのですが、エロイのでＩｍｏｄｅでは控えさせていただきます……。裏としてまとめて載せたいけど、Ｉｍｏｄｅじゃ容量の関係で多分読み込めない……。

初体験

「たまには……その、君がいつもしてくれているみたいに私がしてもいいだろうか？」「えっ！！」

イキナリ御剣にそんなセリフを吐かれて、僕は目を丸くした。
「駄目か？？」
更に可愛らしく首を傾げられて、内容の素晴らしさとは裏腹にドキドキしてしまう。けど……それってやっぱアレだよな。
いつも僕がしてるみたいにってことは……今日は、僕が……入れられる側ってやつ？まあ御剣も男だし僕のこと好きならそういうこともあるかも。
御剣が僕を好き……。フフフ。って喜んでちゃいかんいかん！！
ああっ！！
どうすればいい！？
そりゃ嬉しいよ。御剣が僕のことを欲しがってくれてるって言うのは。
でもそれでも譲れない一線って言うのはあるじゃないか、なあ！
御剣は黙り込んだ僕にそれを肯定ととったのか顔を近付けてくる。
手が僕の頬に触れた。
ああっついに僕も受けデビュー！？
「成歩堂……」
眩暈がするほどの甘いキスに、僕は思わず舌を絡めようとする。
絡めようとすれば逃げられて、口腔内を舌が這う。
… … これって、まるで、いつも僕がしているキスみたいな。
御剣がしたいっていうなら、仕方ないのかもしれない。
僕は今まで彼に同じコトをしてきたんだしね。
僕は御剣が好きだし、御剣が同じように思ってくれているなら歓迎しよう。
「好きだ」
御剣の、声。
好きだと囁く甘い、甘い声。
ああ……本当にくらくらする。
何度も軽く口唇がついばんで、そんなに柔らかくはない僕の髪をさらりと撫ぜる。御剣の手の方が、しっとりとしているに違いないんだ。

あの少し大きめの、でも白くて柔らかい掌で。
「僕も好きだよ……」
口唇が、首筋を辿った。
緊張する。緊張するけど……。これってマズイ。
無茶苦茶押し倒したくなってきた。
したいと言っている御剣を、この後に及んで押し倒したら怒られるよな、絶対。ああ、でも、でも！！
こんなオイシイ御剣を放っておけるか！？
「御剣……」
「成歩堂……」
うっとりと潤んだ瞳で見つめられて、理性が切れそうになる。
御剣が僕をぎゅーと抱き締めて、ほうと息を吐いた。
「結構、照れるものだな」
… 。そのまま、御剣がコトを進めてくる様子はない。
照れるから止めたの？
いや、そうじゃなくって……。
「み、御剣？」
「む？ どうしたんだ？ や、やはりどこかおかしかったか？」
ひょっとして、もとからそのつもりだった……ってこと？
「その。いつも僕がしてるみたいにって言うのは……」
「今しただろう。好きだって言ってキスして抱きしめた」
「最後までとか……」
「なな、何を言ってるんだッ！！ まだ昼間で、しかもここは君の事務所だぞ！？ そんなこと、するワケがないだろう！」「でもキスとかしたじゃん……」
「それは……」
御剣がふいと横を向く。
ああ、可愛い。なんて可愛いんだ。

やっぱり抱きたい……。
「君が一生懸命仕事をしているのを見たら、したくなったんだ」
「御剣」
「な、何だ」
「すきすき。大好き。お前の事、本当に愛してるよ」
「い、いいから、仕事に戻りたまえ」
「それでね、身体が仕事に戻れないくらい盛りあがっちゃってるんだけど、どうしよう？」僕はそう言って、御剣の頬を両手で挟み込んだ。
「とりあえず。御剣が、さっきしたみたいにしてもいい、かな？」
「……ああ」
さすがにした手前、御剣も嫌だとは言えないのか、頷いて目を瞑る。
うん……。僕は、好きだって言ってキスして抱きしめるだけじゃ、足りないけどね。だって、こんな可愛い御剣見せられて、我慢できる筈がないじゃない。
… … というわけで、昼間の事務所初体験。
久しぶりに、御剣にデートに誘われた……と言っても喫茶店。
当然浮かれまくりの成歩堂であるが、どうも彼の様子がおかしい。
思いつめて、酷くやつれている。一体何があったのだろう。
こんな気落ちをした御剣の顔は、初めて見る。
いや……初めてではない。裁判に追い詰められたときのような、そんな。「ど、どうしたんだよ。御剣……」
恐る恐るそう聞いてみると、御剣はフイと瞳を逸らした。「どうしたもこうしたも……」
手をふるふると振るわせて、今にも爆発しそうだ。「落ちついて、御剣……」
「これが落ちついてなどいられるか。クソッ……」御剣の手が、テーブルをダンっと叩く。
「成歩堂……」
「な、何？」
「落ちついて聞いてくれ」

むしろ落ちつくのはお前の方だろと思いつつ、成歩堂が御剣の言葉をじっと待っていると、彼は大きな溜息と一緒に言葉を吐き出した。

初めは、言われた言葉がカタチにならず、成歩堂は思わず、え？ と聞き返していた。

御剣は先程と同じように、大きく息を吐いてもう一度。

「実はな、子供が……できたんだ」

ぐらりと眩暈がした。

… … 子供？ ……子供、が、御剣に……。御剣が、誰かに子供を孕ませた……。

イイカンジで付き合っていると思ってた。愛し合っているとも思っていたのに、イキナリ聞かされた裏切りのセリフに、今度は成歩堂が心落ち着かなくなる。きっと明日には……いや、今から数時間後には、御剣よりもやつれてしまうだろう。

「ど、どうする……の？」

「どうするとは」

「僕とは……別れるのか？」

御剣は、う……と言葉に詰まった。

まさか聡明な彼が考えていなかったとは思いにくいが、突然の自体に混乱していたならばそんなことも有り得るかもしれない。

唸った御剣から出てきた言葉は、押し殺すような声色で。

「君は……そんな責任感のないことをいうのか？」

「だって！」

別れたく、ないんだ。

誰かの、とは言え……片方は御剣の血が繋がった子供。それが今も育っていると言う事実に、成歩堂は自分のエゴを飲み込む。

子供のためにも、ここで別れるべきなのだろう。

半ば本気でこみ上げてくる涙を抑えて、色々と聞いておくことにした。何も知らないのは嫌だった。その権利が自分にはあると、少なくとも成歩堂はそう思っていた。

「それで……相手は誰なんだ」

こんなチープな台詞しか出てこない成歩堂だが、これはまあ、セオリー通りだ。

相手の名前くらい、まずは聞いておきたいだろう。

しかし、その台詞を吐いた途端、御剣は怒髪天を衝く勢いで立ち上がった。

「君は、最低な男だな」

上から水をぶっかけられて、成歩堂は呆然とした。

何故。何故だ。相手の名前を知る権利くらいあるのではないだろうか。

それくらいで最低だと言われ、あまつさえ御剣は周りの客が注目する中、成歩堂を残し店の外に出ようとしている。「ま、待てよ、御剣！」
慌てて追いかけて、腕を掴む。
振り返った御剣の顔は涙で濡れていた。
「御剣……」
ぎくりとしていると、今度は平手が飛ぶ。
「私は、浮気をするほど不誠実な男ではない！」
つまりは奥さんが大事だから、別れてくれと。詮索はするなとそういうことなのか。こんなに愛しているのに……。
確かに、名前を聞いたら探し出して殺してしまいそうだった。
結婚式に呼ばれることも苦痛だ。絶対に浚って逃げてしまう、それは確実。
けれど、別れたくない。やはり、別れたくはないのだ。
成歩堂は必死で御剣を追いかけた。
やや御剣より足が速いので、彼の腕を再度掴んで路地裏に引きずり込んだ。「な、御剣。やっぱり、お、おお、落ち着いて、話をしよう。ぼ、くは、君と別れたく、ないしっ……」
よほど成歩堂の方が落ち着いていなかった。
今度は、御剣にむしろ君の方が落ち着いてくれと突っ込まれかねない焦りっぷりだった。
無理もない……。好きで好きで堪らない彼に、子供が出来たなどといわれ、あまつさえ結婚するから別れようと言われたのだから。
「別れたくない？」
怪訝そうな顔をする御剣に弱気になりながらも、こくこくと頷く。
どんなに罵られてもいい。生まれてくる子供を母無しにするつもりなのかと攻められてもいい。
むしろ、片方だけでも御剣の血が繋がっているのなら、育てたい。
「だから、その相手とは別れて。僕たち二人でその子を育てよう」
「成歩堂！ 君は本当に最低だ……ッ！」
「判ってる。そんなこと、判ってる。でもッ……！」
しかし、成歩堂は判っていなかったのだ。本当に。
この次に出てきた御剣の言葉で、それを思うさま自覚させられた。「君は……私が浮気をしたと、そう思っているのだな？」

冷ややかな声だった。
そんな低い声のトーンよりもその内容に、成歩堂は目を丸くする。
「は？」
だって、浮気をしていなかったら、何だと言うんだ。
子供ができたって言ったじゃないか。
… … そういえば、誰の子供ができた～とかは言っていなかったような気がする。まさか、親戚の子供……とか、そういうオチか！？
急に考えていたことが馬鹿らしくなって、成歩堂は笑みを洩らした。
「なんだよ、それならそうと早く言ってくれよ、心配しちゃったじゃないか」
「何がだ」
御剣の顔はマジだった。
「親戚の、子供……とかなんだろ？」
「だったら、責任感がないだのなんだの、言う筈がないだろう」
「じゃ、じゃあ、誰の子だよ」
「私と君の子供に決まっているだろう」
時が、それはそれはみごとに止まった。
確かに、成歩堂は判っていなかった。
しかしそれは仕方のないことだった。
… … 判りようがないだろう。こんな展開は。シリアスに始まっておいて、実はギャグだったなんて。

というワケで、御剣ご懐妊ネタスタートです。嫌いな人はココから先を読まないでください……★
というワケで、続く！

唐突な有罪判決２

「すまなかったな。取り乱して……。病院へ行って、宣告され、あまりのことに気を失わんばかりだったんだ」「いや……判るから、凄く」

まあ、あれだけ毎日毎日毎日………………してれば、こんなこともあるのかもしれない。

ないと言われても、あってしまったのだから仕方ない。

「世紀末もとうに過ぎましてね～、こんな突然変異も、結構出ているんですよ」

宣告された途端実験動物にでもされるかもしれないと身構えた御剣は、医者のこの言葉に椅子から落ちそうになったという。

「でも……」

成歩堂がにんまりと笑う。

「僕の子かァ……」

「むう」

御剣が照れくさそうなのが、可愛くてまたイイ。

「とりあえず、君は将来有能な弁護士で、私は今現在エリートな検事だ。経済面ではこの子に苦労させることもないだろう。君はたくさん働いてもらわないとな」

「勿論！ でさでさ、さーらせて？」

「へらへら笑うな！」

「いいじゃん、嬉しいんだよ～」

そう言って、成歩堂は御剣の腹に手を当てる。

「あっ、動いた気がする」

「そんな筈あるか。まだ三ヶ月にもなっていないのに」

「あはは～。だって、嬉しくて嬉しくて」

成歩堂は嬉しさのあまり、ネジが一本飛んでしまっているようだった。

「女の子かな。男の子かな。どのみち、御剣に似たら美人だろうな」

「私は……性格は特にだが、君に似て欲しいと思っている。君のように、まっすぐな……いざというときは、友人を助けられるような芯の強い子に育って欲しい」

改めて好きだと言われている様で、成歩堂は御剣をほうと見つめる。多分、御剣は、自分ではどれほどの殺し文句を言っているか
に気付いていないのだ。

「愛してるよ、御剣……。僕と、ずっと一緒に、暮らそう？」

ぎゅ、と手を握り締めた。二人は目と目を合わせて、ゆっくりと見詰め合う。

「成歩堂……」

「一生、幸せにします」

「当たり前だ」
「はは、なんだか、僕のが凄い幸せ、なんだけど」「何を言う。私だって、君とこうして一緒にいるだけで……」甘い口付けが、誓いのように密やかに交わされた。
… … けれど……これは全然密やかではない。
そう、二人ともすっかり忘れていたのだ。
ここが普通の喫茶店だということを――……。

一区切り～と……。
ここで唐突な有罪判決は暫くお休み。
次Ｐからは全然繋がりのない話が始まります。

気付けない永遠

愛に永遠なんてものはないと思う。
けれど、友情にだって永遠という言葉は存在しないのだと思わされた、僕。

追いかけた。
彼をひたすら追いかけた。
追いかけて、追い続けて、追い求めて。

彼の姿に目を止めた瞬間。
嗚呼。やっぱり友情には、永遠なんてないのだと。改めて思った。けれど……愛には永遠があればいいのにと、夢を見る。

友情すらも失ってしまっているのに？

助けておいて期待させておいて僕にだけは弁護を頼まないと言い張る。友人としてでもやっていけないのなら、いっそ。
その想いはどれほど甘美な誘惑だろう。
結局、君は助けた僕に感謝する。言葉には出さないけれど、感謝をする。
ここで友情に戻れた筈なのに。

永遠の友情。
君がそれを望んでいた。ちょっと前の僕もそれを望んでいた。

友人としてでもやっていけないのなら、いっそ。
誘惑的、蠱惑的に、甘美に響く言葉。

もう、友人としてやっていける権利は身につけたのに。
それを否定して。あいつの言葉さえ否定して。
狡い囁きを……耳に落とした。狡い囁きは、心の奥底から生まれてくる。

友情に永遠という言葉は存在しないのだと思い込んだ、僕。
愛は永遠に続くのだと。続かせるからと、言い聞かせた僕を、信じた君。
信じた君が悪い。
でも、一番悪いのは……。

君が信じたと、思い込んだ僕。

御剣の窮地を救った。彼の心を救った。
「オメデトウ、御剣」
薄く笑う。手を差し出す。その手を取った君に、卑怯な言葉を囁いた。
僕の腕の中に納まった君を家に連れ帰って、身体を繋げる。「好きだよ。僕は君が……好きだ。だから、抱かせてよ。君を救った僕に、君を頂戴」心は無理でも、身体くらいは。
抗う腕を押さえつける。躊躇う瞳は見ない振りをする。
ぐ、と身体を進めると、高い悲鳴が上がった。
「あ、ああっ……」
思ったよりもエロティックな響きのある声に、僕は夢中になる。
「後ろ、イイ？ 初めてで感じるなんて、やらしいね、御剣」
「やっ、も……よせ。動くなッ……！」
「無茶言わないでくれよ」
無茶を言っているのは自分の方だと判っていて、蹂躙した。
あんな台詞を吐きはしたけれど、御剣は苦痛に顔を歪めているだけで、快感などはなかったのだと思う。僕はそれを判ってて、彼の身体を”欲しい”という独り善がりな想いだけで彼を犯してしまった。
「愛してるよ。永遠に、お前のことが、好きだ」
御剣は声に出さずに、口の形だけで僕の名前を呼んだ。
拒む腕には、既に力が入っていない。
背筋を何かがぞくりと駆け上がる。
御剣が友情を続けたくて僕を受け入れているのは判った。そんな心につけ込むようで悪いけど、僕はやめられない。

だって、好きなんだ、本当に。

できることなら……お前が僕に愛想を尽かすまでは、永遠だと信じていたい……。

「何故泣くんだ……成歩堂」

僕の瞳からははたはたと涙が零れ落ちていく。

おかしいな。本当なら、泣くのは僕じゃなくてお前のはずなのに。

「……御剣。嘘でもいいから……」

吐き出すような僕の言葉に、御剣が眉を寄せる。

「何だ？」

こんな情けないことはいいたくない。

でも、言葉は止まらない。

「……嘘でもいいから、愛してるって言って……」

「……君を、愛している」

それは……、僕を余計に苦しくさせただけだった

情事の後で、僕は都合のいい夢を見る。

「君の言葉を信じている。でも……それを君に言うことは出来ない。君は、永遠がないと判っているからこそ、それを追い求めたくなるような性格だからだ」

これが現実だったらいいのに、と思う。

身体が動かせない、まどろむ夢の中にいる僕には幻と現の区別がつかない。

望みすぎて望みすぎて望みすぎた事柄を夢や幻として見てしまうことはよくあるから。

「成歩堂……君を愛している」

欲した言葉は、夢の中でないと聞こえてこない。

けれど、ふわりと僕の髪を撫でる感触は、どうにも夢と思えない。

君がそれを僕に気付かれたくないと思っているのなら、騙されよう。

僕の言葉を信じてくれた君と、君の真実を知らない振りをする、僕。

いつか。これが永遠になりますように。

終わりです！
ポエムちっくな久々のシリアス。次からはまた、いつもの通りコメディテイストで頑張ります♪

唐突な有罪判決３

とりあえず、まずは籍を入れるべきだろう。

「御剣。僕と結婚しよう」

「けけ、結婚だと！？」

「とりあえずさ、御剣……お前の父親の墓に行こう。そこで報告するんだ。息子さんを僕にくださいって」

「成歩堂……」

御剣は目を潤ませて、次いでハッとしたように身構えた。

「や、やはり私も……挨拶に行くべきだろうか」

ちなみに、成歩堂の両親は健在だ。

幼馴染だっただけあって、御剣のこともよく知っている。

そんなトコロに、挨拶をしに来ると言うのか！？

数年前、同性同士の結婚が認められたとはいえ、どちらかと言えば保守的な日本人は一部しか籍を入れていない上、結婚式を挙げないのが基本だ。

特に、成歩堂はともかく御剣のように立場のある存在は……。

「うちに……来るの？ 僕を、くださいって」

「む、むぅ」

「フフフ、そんなに考え込まなくても平気だよ。僕、もうお前と付き合ってて添い遂げる気だって、言ってあるしさ」

「な、なんだと！？」

「そうじゃなかったらいきなり弁護士を目指すなんて奇行に何も言わないわけないだろ」

「そ、それでは君は私が君を好きなるかどうか判らないうちから、むしろあんなストーカー紛いの手紙を送りつけているときから、勝手にそんな気だったのか！？」

成歩堂は、御剣と同じようにむうと眉を寄せた。

「ん～……。まあ、そうなる、かな」

「私が……その、君を好きだったからいいものの……本当に嫌っていたらどうするつもりだったんだ」

「考えてなかった」

「考えてなかっただと！？」

「お前のことを好きで好きで好きすぎて、そんなことを考えている余裕なんてなかった。ただひたすら追いかけたよ」

「成歩堂……」

「だから、うちの両親は大丈夫。むしろお前連れて行ったら喜んでくれるだろうな。ああ、一方的じゃなかったのね、って。凄い心配してたからな～……僕、ストーカー入ってたし、ほんとに」

ああ、一応自覚はあったようだと、御剣は今更ながらホッとした。

自覚がないのが一番怖い。

「まあ、君になら……それでもいいほど、私も好きだったから……いいがな」

「御剣～！ 可愛い！！ 今夜も寝かせないから、覚悟しろよ」

「まま、待て、籍の話はどうなったんだ」

「こんなに可愛い君を見せられてそんな冷静じゃいられないよ……」

「お腹には子供もいるんだぞ！」

「あ、そうか……。でもまだ今くらいなら平気じゃない？ 適度な運動はいいって良く聞くし」

あわや押し倒されそうになって、御剣は必死でそれを拒んだ。

成歩堂の言ったことに、納得のできない部分がひとつだけある。

「き、君のは……絶対適度にならない！」

「……」

成歩堂は……異議を唱えなかった。

そして今度は妙に無言になって、御剣ともくもくと婚姻届を書き始める。

「な、成歩堂……？」

「これが、僕たちを法的に繋げる、愛の確認作業だよ」

「……そうだな」

「ベッドではいつもしてるけどね、って、駄目だ駄目だ！！ 考えちゃ駄目だ！」

必死で気を落ち着かせているらしい成歩堂に、御剣は柔らかく微笑んだ……。

「……そうだな、君と……何か一緒に出来るというのは、その。何であっても嬉しい」

その後、御剣が適度な運動をさせられたかどうかは……定かではない。

そして更に数日後……。二人を繋ぐ各関係者の元に、結婚式の招待状が届いたのだった。
ショックで男泣きをするものが多数。特に御剣が妻とあっては、周りはひたすら羨ましがる。
成歩堂はひょっとしたら養うどころか養われるくらい甲斐性がないが、まあ将来性に期待ということで。「夜ならな～甲斐性あるんだけど」
「……馬鹿者」
なんだかんだで新婚ラブラブカップルは周りをピンク色の空気に染めながら、幸せそうにしていた。

唐突な有罪判決４（電車でＧＯ）

「御剣……。手と足、両方一緒に出てるよ」
「う、うむ……」
今日は、ナルホドの家に挨拶に行く日だった。御剣のフリルはいつもより多い十段フリルで……というのはまあ、冗談で、まともなスーツを着ていた。
どんなものを着ていても中身が良いので問題はない。あまり奇抜な格好でない限りは、だが。
普段のフリルが奇抜な格好でないかどうかは別として、ひたすら緊張をしている御剣は電車に乗ってからも一言も発さない。
組んだ手に額を乗せて、浅く息を吐いているだけだ。
俯いているので見えないが、絶対に眉間に皺を寄せているだろうとナルホドは思った。
「緊張してる？」
「当然だ……。ナルホド、君に兄弟はいなかっただろう」
「え？ あ、うん。いないよ」
「私が君と一緒になれば、血が絶えてしまう……」
「何言ってるんだよ。子供、いるじゃないか」
御剣は今気付いた、と言うようにハッと顔を上げた。
「そうだ。そういえばそうだった……。あまりに有り得ないことなので、その事実を頭から削除していた」

「ははは、御剣ってば」

幸せそうに笑う成歩堂と、少々顔を赤くしている御剣。

「そうだ。弁当でも食べようか。作ってきたんだ」

「き、君がか！？」

「そうだけど」

「意外だ」

「ひょっとして弁当って売られているのが当たり前で自分たちでは作れない物だと思ってたりする？」

「君は私を馬鹿にしているのか。そんなワケあるまい。ただ、君が作ってきたと言うのが意外だったのだ」

「あー。僕、意外と家庭的なんだよ、うん。だから御剣も安心していいよ。でも嫁はお前だけどね」

うっとりと、成歩堂怜侍かぁ……。などと呟いている成歩堂に、御剣はキッパリと言い切った。

「そのことだが、私は姓を変えるつもりはないぞ」

「ええっ！ 何で！？」

「子供は成歩堂を名乗らせてくれて構わない。だが、私はダメだ」

「だから、どうして」

「冷静になれ、成歩堂。私は検事で、君は弁護士だ。結婚していることも、一部意外では機密事項にしておかねばならない」

「そ、そっか……。そうだよな。寂しいけど、仕方ないか」

しゅんとしている成歩堂の口唇に甘い感触が満ちた。

「……その代わり、家では甘くしてやるから、いいだろう？」

まさか御剣がこんなことをしてくれるとは思わなかった成歩堂は、必死でこくこくと頷いた。

口は開きっぱなしで、ジッと御剣を見る。御剣はひたすら赤い顔で、視線に絶えられないと言うようにそっぽを向いた。

「僕って、幸せものだよな。罰があたるよ、これ以上望んだりしたら」

背もたれに寄りかかって、至高の表情ではーとため息を吐く。

「何を悟ったふうなことを言っているんだ。それより、君の作った弁当が食べたい」

その言葉は照れ隠しと判るものだったので、成歩堂はにんまり笑って彼に弁当を差し出した。

親に挨拶をするということで、御剣は本当に緊張していた。箸も上手く使えないほど。

成歩堂は前にああ言ったが、本当に男の嫁などで納得してくれるのだろうか。

可愛らしい女性を家に連れてくるのを、ずっと待ち望んでいたのかもしれないのに……。

考えても仕方ない、と思いながら、手が震えて箸の使えない御剣は、彼の趣味もあって成歩堂にご飯を食べさせてもらっていた。

「好きな人にこうやってご飯食べさせるの、夢だったんだよね～」

「君は……乙女だな」

「な、何言ってるんだよ」

「だが、普通は女性にこんなことはしないんだぞ。そんなことを言い出して、かなり引かれたのではないか？」

くすりと笑う御剣に、成歩堂は笑って返す。

「ホント、何言ってるんだか。僕の初恋は実っちゃってるんだけどな？ つまり、御剣にこうしてご飯食べさせるのが夢だった～ってことなんだけど？」

「ぐっ……。ごほっ……」

「へ、平気か！？」

思わずむせてしまう御剣だった。

「……大丈夫だ。しかし、何度聞いても心臓に悪い話だ」

「失礼なことを」

「まあ、私も……君と、同じだが」

今度は、成歩堂がむせる番。

こんなラブラブカップルを乗せた電車のアナウンスが、目的地到着を告げる。

挨拶は、もう目の前。覚悟を決めた御剣も、ここぞとばかりに緊張する。

それでも……二人でいれば、怖いものなんてない。

それは機密事項だのなんだの言っておきながら周りに注目されているに関わらずちっとも気にしていない二人の態度が証明していた。

二人の雰囲気を作り出せてしまう人間に、怖いものなど無いのだ。

唐突な有罪判決５

えー……あー……うーん。

喉の奥から何かが出かかりそうな咳払いを発して、御剣が自分の服装を見つめた。

照れたようにナルホドの方を向き直る。

「私の服装は、どこかおかしくないだろうか」

そう尋ねる。

もう何度目かになるその質問にナルホドは苦笑した。

いつもと同じ、綺麗な御剣の姿。

誰が見ても真っ当で、誰が見ても美しい、自慢できるナルホドの恋人だ。

「大丈夫だよ」

やはり何度目かになる答えを、ナルホドは返した。

何度も何度も同じ質問をしてしまうのを、御剣本人も気にしていたらしく、彼は居たたまれないような顔で俯く。

「す、すまない……」

「何、急に」

「幾度も同じ質問をしてしまって……。き、君だって呆れるだろう。なのにきちんと答えを返してくれる。私はみっともないな。私は……その、こんなことで本当にまともに君のご両親に挨拶ができるだろうか」

まともに挨拶ができるかは今の様子を見る限り定かでない。

けれど、そんな御剣の様子を見てナルホドが呆れるということは絶対にない。

「呆れるはずがないじゃないか。何百回聞いてくれたっていいよ。僕は、そんな可愛いお前が好きなんだからさ。愛してるよ」

「ナルホド……だ、誰が可愛いというのだ」

「だから、お前に決まってんじゃんか」

「バカだな……」

「バカでもいーい」
ぎゅっと御剣を抱きしめる。
好きが溢れて仕方なかった。

「できればそういうことは、家の前でなくてせめて中でやって欲しいわねー」

「うわっ！ か、母さん！」

「こここここ、これは失礼したっ！」

「って、帰るな、御剣ー！」

御剣の顔は嘘のように真赤だった。

そんな御剣にナルホドの母親が詰め寄る。

「本当に自分の意志でここまで来たのね？」

「は、はいっ」

「催眠術とか、かけられてない？ って、かけられてたら答えられないわよねえ。困ったわ」

「さすがにそれは酷いよ、母さん……。何時の間に僕は弁護士以外の職業になってるんだ……」

「いや、だがナルホド。催眠術にかけて相手に自白させると言うことができれば裁判も今より簡潔にできるかもしれんぞ。さすがはナルホドのお母上だ」

「ねえ、龍一。怜侍くん、こんな面白い子だったかしら。やっぱりアンタ、催眠術にでもかけてるんじゃないの？」

「母さんは酷いし、御剣は御剣でイイ具合に混乱してるし……」

まさか本気じゃあるまいなと思ってはみたが、御剣の表情はよく彼が混乱しているときにするものだった。

… … 成歩堂母はかなり本気そうだということを付け加えておこう。

「とりあえず、家の前で立ち話もなんだから、入って入って」

その言葉に勇気をもらうように、御剣は家の中に足を踏み入れる。

どうやら自分が招かざる客ではないと認識したようだ。

それに続いて成歩堂と母も。

中に入ると居間に通され、お茶菓子を運んで来てくれた。

「良く来てくれたわねー。やっぱり龍一の言葉だけじゃ信じられなくて。良かったわ、犯罪してなくて」

「母さん！」

「それで。本気なの？ こんなのでいいのね？ 後悔しないわね」

「本気です。後悔は……するかもしれませんが、私はこの男とずっと一緒にいたいと……思っています。愛していますから」

その言葉に成歩堂は胸を高鳴らせた。

二人きりでいる時でもあまり言わないその台詞を、自分の肉親の前で言ってくれている。

頬を染める御剣は誰が見ても可愛く、成歩堂の母親も嬉しそうな顔で笑った。

「うちの龍一とは大違いだわ、ホント。こんな可愛い息子ができるなんて、嬉しいわ」

「息子……」

「結婚するんでしょう？ 今日はその報告に来たんじゃないの」

御剣の瞳から涙が溢れる。

最近彼はよく泣く。情緒不安定なのかもしれない。

「絶対、幸せにします」

「私は龍一が貴方を不幸にしないかどうかの方が心配だわ」

「ふふふっ、そうですね……。でも大丈夫です。私は、彼と居られれば幸せですから……」

その台詞に、成歩堂だけでなく母まで赤くなった。

「み、み、御剣～！」

場所をわきまえずに成歩堂が思わず御剣に抱きつきかかる。

瞬間、二つの殴打音が響き渡った。

しかし成歩堂を殴ってしまってから、御剣がハッとしたのも事実だった。

相手の母親の前で恋人を殴るなどと……。

「も、申し訳ない」
「いいのよ。どんどん殴ってやって！ そうでもしないとつけあがるわよ、この子は」

「ハ、ハイ」

「うう。二人して……」

二人に殴られた成歩堂は、しょんぼりと肩を落とす。

自業自得だ。

御剣的にはいじけている成歩堂に付き合っている余裕はなかった。

彼には、もう一つ告げなくてはならないことがあったからだ。

そればかりは。こればかりは……恥ずかしすぎる。

結婚を告げる時は緊張だが、こちらは羞恥が先にたつ。

成歩堂は母親に付き合ってるとかなんとか告げているのだから、母親も覚悟

はできているのかもしれない。

大人同士なワケであるし。むしろプラトニックという方が貴重だと思う。

だが。改まって。子供ができました、というのは……。

告げているようなものだ。

… … 息子さんとしましたと。しましたと。ナニを……。

というより、望まれるままヤられていますと！！！

御剣は恥ずかしさのあまり蒸発する水分を補給するようにお茶をこくりと飲んで、乾く口唇を舐めて湿らせる。

そのどこか憂いを帯びた表情に、成歩堂は御剣の心の中も知らずにメロメロだった。

「その。申し訳ないのですが」

結婚をすると言ったのだから申し訳ないも何もないのだが、御剣は恥ずかしさのあまり舌が上手く回ってなかった。当然頭の中もだが。

「こ、こ、ここ、こっ……」

「御剣、ニワトリみたいだぞ」

成歩堂をガッと殴って、そして勢いをつけて。

「子供……がっ！」

そんな様子の御剣にピンと来たのか、母親は御剣の手を取って力説した。

「いいのよ。そんな、気にしなくて！ 申し訳ないなんて思わなくて！ むしろ嬉しんだから！」

「は、はあ……そう言っていただけると……」

「そりゃ初めは混乱したけど、あまりに危ないあの子に付き合ってくれたのを本当に感謝しているし、貴方という子供ができただけで、孫なんてもう見れなくてもなんとも思わないから！」

母親の言葉はもっともだったが、この場合外していた。

今の流れでどうしてこうなるのか……鈍すぎる。

というのは、この夫婦が男女だった場合なワケで。

今の流れで御剣に子供ができているなんて思う方がおかしすぎる。

けれどこの結婚を思い切った原因は……そこにあるのだ。

「いや、その……孫の顔は、見れると思うんですが」

「え？ まさか……養子？」

「いえ、そうではなくて……。実は、子供が……できてしまったんです」

当然ながら、今までひたすら明るかった成歩堂母が、初めて固まった。

「……え？」

「結婚に踏み切ったのも、それが理由でして……」

「……え？」

ワケの判らない、と言った様子な彼女に焦れて、成歩堂は母親の前で起きているかを確認するように手を振り、御剣の腹に手を充てた。

「だから、ここに。僕と御剣の赤ちゃんがいるってワケなんだけど」

「だって、怜侍くん、男の子……よねえ」

「ええ、そうなんですが。それはもう、人体の神秘というかなんというか」

「珍しいこともあるものねえ」

二人とも、いい具合に混乱していた。

一見すると落ち着いて見えるのだが、どこか言葉が浮いている。

この場で一人冷静な成歩堂は居心地悪そうにしていた。

「母さん、僕の部屋、そのままになってる？」

「あ、ええ……、そのままになっているけど、いいの？」

「え？ 何が？ とりあえずさ、御剣、僕の部屋に……」

「そうだな」

「あー、怜侍くん。とりあえず母さんは二人の結婚にはね、賛成だから。安心してゆっくりしてって頂戴。お父さんも賛成してるから。何があっても龍一と仲良くね！」

「ありがとうございます」

この母親の言葉を最後に……御剣の中で、一つ気持ちが落ち着いたらしい。

ほう、と溜息を吐いた。

第二ラウンドは父親であるワケなのだが、成歩堂の部屋に案内された途端、御剣は早くも新しいラウンドがスタートしたような気がした。

母親の、何があっても、という言葉が彼の頭の中を反芻したに違いない。

そして成歩堂は、自分の部屋の状態を忘れていたことを酷く後悔した。

「なんだ、これは……」

冷ややかな、御剣の声。

成歩堂の部屋の中には一面に小学生怜侍の写真が……。

「うわあー！ 確かにそのままだけど、マズイ～……」

「ということは、前からこの状態だったということなのだな！？」

「いや、それはその……まぁ」

御剣はここへ来て初めて母親が自分に感謝していたわけが判った気がした。

「私が君のことを好きでなければ……本当に犯罪の域だぞ、これは」

「べべ、別に隠し撮りした写真ってワケじゃないし、そこまで犯罪性のあるものは……多分、そのお……」

「法廷まで追いかけてきたくせにか？」

御剣の目は、冷ややかだった。

「お……怒って、る？」

「大体だな、こんな小学生の頃の写真をいい大人が眺めて手紙などを送っていたら犯罪だぞ……ホントに」

「じゃあ今の御剣だったらいいってこと？」

「……」

怒っているので赤いのだろうと思っていた御剣の顔は、今は複雑そうな表情を称えていた。

成歩堂は、ピンと来て、また怒られるかな、と思いつつ尋ねてみる。

「怒ってるんじゃなくて……照れてたり、する？」

「うっ……うるさい！」

図星だったようだ。

更に真っ赤になって口を噤む御剣が可愛くて仕方ない。
「ねね、御剣。僕たちの子さ、御剣に似てるかなあ。この写真みたいになったりして」

「少なくともこんな部屋を見せれないのは確かだ。親がストーカーだと知ったらショックを受けるぞ」

「う……。も、もういいだろ、その話は。今は……両想いなんだし、さ」

「むう……」

「へへ、可愛い、御剣」

「だ、誰が可愛いだとっ」

照れまくってまるで熱があるように赤い御剣に誘われて、ちゅ、と軽いキスを落とす。

そして甘えるように額をこつんとぶつからせた。

「ん……？ 熱い……？」

「え？」

「御剣、熱があるんじゃないか？」

「確かに少しだるいが、そんなたいしたことはないぞ」

「まあ、微熱くらいだと思うけど……風邪は引き始めが肝心だし」

「というかだな、多分、その。これのせいだと思うのだが……」

御剣はそう言って、自分の腹をそっと撫ぜた。

今度はつられるように成歩堂が赤くなる。

「あ、そっか。そうだよな。つわりとかは大丈夫？ 気持ち悪くなったりしない？」

「その辺りは個人差があるからな。私は軽い方だと思う」

あまりに普通に振舞っているので、御剣の苦労に気付いていなかった。

その罪悪感もあるのだろうが、成歩堂は殊更御剣の身体を気遣い始めた。

「長い間電車にも乗ってたし、少しゆっくりした方がいいかも」

「だ、大丈夫だと言っている」

「いーや、ダメだ。もう……お前一人の身体じゃないんだからな」

「……お約束な台詞だな」

「うん。実は密かに言ってみたかった」

「だろうな。気遣ってる割には顔が嬉しそうだ」

「う……やっぱ？」

「しかし開き直ってはみたものの、やはり不思議な感覚だ。この中に命が宿っているということも、世の母親と同じ感覚を味わっていると言うことも……」

「それに関しては僕もびっくりだけど、嬉しいからいい」

成歩堂は言葉どおり心底嬉しそうな表情で、御剣の腹にぽふんと頭を乗せる。

「早く出てこないかな。心音聞こえるかな。お前の心臓の音と混じって、判らないや」

へへへーと笑う成歩堂は御剣の目にとても可愛くうつって、君も人のことは言えないなと思いながら、気持ちをこめてそのとんがり頭を撫ぜた。

そんな行動に出た御剣が意外だったのか、成歩堂はひょいと顔を上げる。

そこには……男にたいして殊更妙な表現ではあるのだが、母性を含む微笑を称えた綺麗な御剣の顔があって。

「ひょっとしたら、今って凄くいい雰囲気ってヤツ？」

「口に出すな。デリカシーのない奴め……」

「父さん帰って来るまでに時間あるんだけどな」

「……おい、まさか君は下に母親がいる状態で……」

「御剣が可愛すぎるのがいけないんだぞ？ えーい！」

冗談みたいな口調で、成歩堂は御剣をベッドに押し倒した。

腰掛けていたのをそのまま倒しただけなので、身体に衝撃はない。

腕などにもそんなに力はこもっていなく、本当に押し倒そうというワケではないのが判る。

じゃれているだけ……そんな感じだ。

「あー、もう、大好きだー」

おふざけの延長線上で、んー、と大げさに口付けてくる。

「ッん、こら、止めないか！」

「やーめなーい。ホントはさあ、高校とか一緒のとこに進学したら、お前とこの部屋でこんな風にふざけたかったんだ。夢だったんだよ、僕の。それが今は結婚できるなんてホントに夢みたいなんだ」

「だ、だからと言ってだな」

「やーめなーい」

「幾ら本気でする気がないと言ってもドタバタしてたらどう思われるか……」

「あはは、それもそうだね。今は友達じゃないわけだしね。親もそれを知っているんだし」

「判ったら……」

「最後に一回だけ、キスね」

「む……」

ちゅ、と軽いキス。

「おーい、早めに帰ってきたぞぉ、龍一ぃ」

同時に、かちゃりとドアが開いた。

… … 。

… … … … … … 。

… 。

それは耐えがたい、空白の間。

御剣は自分の中で第三ラウンドの鐘が見事なまでに鳴り響くのを、聞いた気がした……。

違うんですとか。

まだやってませんとか。

そういうつもりじゃなかったんですとか。

ノックくらいしてくださいとか（これは正しい反論だと思う）。

何を言っても上滑りしそうな状況で、御剣はどうしたらいいのか判らず音が鳴りそうなくらい固まっていた。

そして……。「お邪魔してます」

現実逃避をした。

周りの人間もどうしたらいいか判らない状況だったので。

「いやいや。狭い家ですが、ごゆっくり」

父親もそれに便乗した。

「お茶が入ったわよ、みんなー」

下から母親の声が聞こえたので、これ幸いに今の状況はなかったことになってしまった。

「おい、成歩堂……行かないのか？」

「ああ、うん。行く、行くよ……」

成歩堂一人が取り残されたような状況で、それでも彼はこっくりと頷く。

結婚をする予定だからこそ、気まずいと言うこともある。

とりあえず母親の方の了解は得ていたし、後は父親だ。

御剣はそう覚悟を決めて階段を降りていった。

父親の方も、母親と同じく御剣のことを心から歓迎してくれているらしい。

成歩堂がどれだけ犯罪者っぽかったのかが見て取れるが、今の御剣はそれに感謝をしたい気持ちで一杯だった。

何しろ息子が男と結婚すると言うのに、この歓迎っぷりだ。信じられない。

「いやあ、しかし綺麗に育ったねえ、怜侍くん。うちの馬鹿息子にはもったいないが、ありがたい。いやあ、若い頃の母さんそっくりだよ、はっはっは」

「面白いお父上だな、成歩堂」

「父さん流石にその誉め方は無茶あるだろ……母さんが若い頃こうだったらかなり怖いぞ」

確かに御剣、顔は綺麗だがどちらかといえばガタイはいい方だ。

細身で華奢な母親が若い頃こうだったのなら、かなり恐ろしいものがある。

「何を言うか。うちの母さんが昔恰幅が良かったのは事実だぞ。ほら、これは思い出のドレスなんだが……」

そう言って父親が取り出したのは、男が着てもおかしくないような、御剣や成歩堂が着て丁度良さそうなドレスだった。

唐突な有罪判決５

新着０７１６
思わず母親の身体に視線を集中させてしまう。

まさか、ホントに――……？

「ふふふ、二人とも、冗談よ。これね、お色直しって言って、父さんが冗談で着たドレスなのよ」

「まあ、そういうことだよ。ウン。良かったら怜侍クン着てくれたまえ」

ドレスを手渡された御剣は、困ったような嬉しいような複雑な顔をしながら、は、はあ……と生返事をしてい
た。

思わず今の母の顔に逞しい身体を合成させてしまい、気分が悪くなったのかもしれない。

成歩堂が夢に見そう、と呟いているところを見ると、想像したのだろう。

何はともあれ、挨拶も終わった。さっきあんなシーンを見られたこともあり、父親の方には子供のことは言い出せなかったが、母親の方が告げてくれているだろう。